

- ◎ 靖国参拝訴訟の大阪高裁判決（05・9・29）をめぐって
政教分離原則の誕生の背景 → 「国と靖国神社との関わりの限度は、我が国の社会的・文化的諸条件に照らして考えるべきである」
＝ 歴史を踏まえた視点 ＝ 政策決定、憲法・法の解釈のポイント

- ◎ “押しつけ憲法”論をめぐって
押しつけられなかったらどんな憲法が出来ていたか
“押しつけ”を決意させた松本案
＝ 歴史に目をつむる押しつけ批判

- ◎ マスコミの戦後責任をめぐって
よく比較される独日
戦後補償の徹底と不徹底
メディアの解体と継続

- ◎ 政界の憲法論議をめぐって
改憲案ではなく「新憲法草案」をめざす自民
民主党の「創憲」の実態
共通点は、現憲法体制のネガティブ評価、戦後的価値観の否定
||
国家より個人、、戦争放棄、軍事を優先価値としない、国際協調
前原新代表の安全保障論
自信を持って発言し始めた財界
改憲を指向する奥田発言
日陰から日向へ出た軍事産業
選挙応援活動をしたトヨタ首脳

背景に国民の a p a t h y ? 本心に a p a t h y か？

◎ 新聞の論調をめぐって

読売 = 改憲をリード 1994・読売改憲試案

産経 = 改憲、戦後否定に躍起

朝日 = 護憲? でも本心は?

毎日 = 論憲、軸足はどこに?

自信喪失、戸惑う両紙

↓

非戦論に高まらない非核、反核論

中日 = 明白な改憲反対、憲法擁護 「戦争はいけない」

◎ 憲法体制の切り崩しをめぐって

9条の形骸化

相次ぐ報道規制立法、21条の骨抜き = 憲法否定の障害を除去

◎ テレビというメディアをめぐって

憲法を伝えない

情緒を伝える 活字メディアの非力さ

メディアを上回る小泉の課題設定能力 = ナチス流情報戦略

↓

小泉の総選挙圧勝

↓

拍車がかかる? 自民党の動き

◎ さて、どうしたら?!

原爆投下から六十年です。遺塵を迎えて、日本社会を「戦後の見直し」という波が洗ったばかりこそ、非核の願いの意味を問い返さなければなりません。

広島と長崎で、原爆死没者名簿に今年もまた新たな名前が加えられます。原子爆弾は投下から半世紀を超えても、なほ人々の命を脅かし侵襲しているのです。犠牲者は四十万人に近づいています。

原爆は「瞬時に」方々という単位の人命を奪いましたが、史上に類のない悲劇は一人ひとりの悲劇の積み重ねなのであることを、まず銘記しなければなりません。「個」を切り捨てた抽象化、統計化は、記憶を、そして歴史を風化させます。

歴史に埋没する悲劇

ヒロシマ、ナガサキが風化と戦いながら発信し続けてきた「核廃絶」の訴えは世界に届いていないのでしょうか。国際社会はむしろ逆の道を歩

社説

んでいるように見えます。

広島市が一九六八年に始めた核実験に対する抗議は、既に五百八十八回を数え、昨年まで途絶えた年はありません。「核の闇市場」など核拡散の懸念がNPT(核拡散防止条約)体制を揺るがし、北朝鮮が核保有を宣言するなど状況は厳しさを増しています。

東西冷戦構造が崩壊し、「新しい戦争」が語られるなかで広島、長崎の悲惨な経緯は歴史に埋没し、忘れられつつあるように思われます。

「日本政府は核保有国にもっと核兵器廃絶を迫るべきだ」―被爆者たちが悲痛な声をあげています。

日本原水爆被害者団体協議会が実施したアンケート「わたしの訴え」で、政府に対する被爆者の要請で最も多かったのは、世界非核化への積極的な取り組み(68%)でした。

小泉純一郎首相は、慰霊と平和祈

念の式典で今年も挨拶しますが、核兵器のない世界を実現するため、日本政府が被爆国として先頭に立つべきだといえます。

被爆地にはいらだち

昨年、広島が平和憲法擁護を、長崎が憲法の平和理念堅持を、それぞれ

本人が大切にしてきた価値観を否定する動きが目立ちます。

この国の力をかたつてのよきな軍事優先の方向に切ることが、「いついそ」の国になることであるとする考えも強まっています。核兵器の保有や使用を法的に容認する極端な意見さえ聞かれます。

初めて核攻撃を受けた日本人が戦

から見て、非戦のシンボルとして世界中から真つ先になくさなければならぬのです。

その意味で、非核の思想は非戦の思想にまで高められ、深められなければなりません。戦争の加害者でもあり、核の被害者でもあり、かつ平和憲法を持つ日本には、国際社会を引っ張る資格も責任もあります。

貧困、飢餓、富の分配

の不均衡な分配を改善する矛盾を抱えた国際社会では戦争や紛争が絶えません。米国の唯我独尊的な姿勢が憎悪と報復の連鎖を招き、混乱は拍車をか

原爆の日を前に考える

「還暦」の誓い新たに

は、被爆地の人々のいらだちを示すものであり、政治への異議申し立てだったといえるでしょう。

争放棄の第九条を含む平和憲法を持つたのは象徴的でした。

唯一の超大国としてこそすれば恣意的な世界戦略を展開する米國に寄り添う小泉流政治、アジア諸國民衆の神経を逆なでする靖國問題、自衛隊の戦力強化、戦争放棄を定めた憲法の改定…大戦の惨禍に学び、日

核兵器を廃絶すべきなのは、大量殺戮兵器だからという理由だけではありません。科学技術が発達した現代では、核兵器に劣らない大型の通常兵器が開発されています。

核兵器は、人間の尊厳を無視し、人類の存続を脅かす究極の兵器だ

から見て、非戦のシンボルとして世界中から真つ先になくさなければならぬのです。その意味で、非核の思想は非戦の思想にまで高められ、深められなければなりません。戦争の加害者でもあり、核の被害者でもあり、かつ平和憲法を持つ日本には、国際社会を引っ張る資格も責任もあります。

いまなお新鮮な原点

アジアの国々をめぐる、加害の歴史を棚上げした、無神経で感情的な言動が、責任ある政治家の間でさえ少なからずあります。

還暦とは単なる任切り直しではありません。刻んできた足跡を振り返り、生まれた時の原点を再確認することに意味があるのです。六十年前